風化させない

71年目のヒロシマ ②

オバマ大統領訪問

世界が注目 非核へ一歩

原爆の威力や被害を学ぶ広島市の平和記念資料館の一角には連日人だかりができていた。展示物を真剣な表情で見詰める人、写真を撮る人…。それぞれの視線の先には、米国のオバマ大統領が贈呈した折り鶴があった。

5月27日、原爆を投下した国の現役大統領が初めて広島を訪問した。わずか52分という短い滞在時間ながら、広島に新たな歴史が刻まれた。

平和記念資料館の入館者は、オバマ大統領の訪問後、増えている。6、7月の入館者数は、前年同期の1・4倍に当たる32万173人となり、うち約2割を占める外国人も1・1倍に増加した。

同館学芸課の加藤秀一課長は「外国人は原爆が投下されたことは知っているが、惨状までは知らない。遺品や資料から被害を学び、自分のこととして捉えてほしい」と述べ、世界各地で理解が深まることに期待を寄せる。

死が空から降ってきた―。オバマ大統領はスピーチで原爆投下をそう表現した。事実をあいまいに表現したことや謝罪がなかったことへの批判もあるが、訪問自体を評価する声は広島市内でも大きい。

それでも被爆者の思いは複雑だ。8歳の時に被爆し、姉を失った岡田恵美子さん(79)=同市東区=は「亡くなった姉が返ってくるならいい。でも返ってこない。『Ｉｍｓｏｒｒｙ』で済むことではない」と胸の内を明かす。

そして続ける。「ここからがスタートなんです」。オバマ大統領の訪問は長年被爆者らが求めてきた。ただ実現することが目的ではなく、期待するのは、ヒロシマを世界に知ってもらい、核廃絶を目指す大きな一歩とすることだ。

引き続き世界に発信するためには、広島の課題もある。広島市内には、平和活動に取り組む団体が200近くあるが、以前から連携不足が指摘されている。岡田さんは「それぞれがばらばらで動いている。もっと個々の団体がまとまって発信しないと、世界に声は届かない」と訴える。

平和式典があった8月6日、オバマ大統領が献花した慰霊碑には例年以上に多くの人が詰め掛けた。午後10時半になっても手を合わせようという人が列を作っていた。

（鳴門支局・大城咲）

オバマ大統領が贈呈した折り鶴に見入る入館者＝広島市中区の平和記念資料館

きのうの気温

31日15時まで（カッコ＝平年）

	最高		最低		
徳島	31・5	(31・1)	19・2	(23・8)	晴
池田	28・9	(30・2)	18・4	(20・1)	
阿南	28・7	(30・1)	20・9	(23・6)	
高松	32・0	(31・4)	21・4	(23・3)	晴
高知	30・7	(31・3)	18・8	(23・2)	晴
松山	30・7	(31・3)	23・3	(23・3)	晴